

質問

医師から「治療効果より副作用の方が強くなってきているので、抗がん剤治療を続けるかどうか、決めてくるように」と言われました。治ると思っただけで頑張って来たのに、これからどうしたらよいか不安でたまりません。

薬剤治療の続否迫られた



杉原 治美
徳島大学病院地域医療
連携センター看護師長

回答

抗がん治療の進歩によって、より延命・治療効果があるとされる薬剤に変更しながら化学療法を受け続ける人が増えています。ご質問のような悩みは、多くの方が抱えています。医療者の間でも「化学療法終了の適切な提案はどのように行うべきか」と議論されています。

薬剤による治療効果があると、患者の方は延命ではなく、完全治癒に期待と希望を持つ反面、いつか「これ以上の治療はありません」と言われるのではないかと不安を抱くことがあるかもしれません。あるいは「治療はいつまで続くのだろうか」と考

自らの死生観で選択を



いつかは訪れる死を「望ましい死」として迎えるため、冷静に判断できる時に「自分にとって何が一番大切か。人生にとって何が重要か」を考えておく必要があります。

日本人の8割以上が望むのは「身体的・心理的な苦痛がないこと」「望んだ場所で過ごすこと」「他者の負担にならないこと」とされています。こうした望みについては医療従事者だけではどうにもならないこともあり、どうしてあげればよいのか苦慮している現実があります。

日本の在宅医療推進の方針を受け、患者の方が自分で判断できなくなった時に備えて医療への希望を留意しておく「事前指示書」やお勧めします。

「終末期からではなく、がんと診断された時から始まっている」と言われています。人間は「おぎゃあ」と生まれた瞬間から、いつかは死ぬ運命です。しかし、われわれは、どう生きてどう死ぬかを考える「死生観」を学ぶ機会がほとんどないまま、医師が決めてくれるのではなく自己決定で治療や療養方法を選択する必要があります。必要に迫られるのが現状です。

地域連携」が注目されています。

また住み慣れた地域で過ごすため、医療・介護にまたがるさまざまな支援の必要性が検討されています。地域の医師、歯科医師、薬剤師、看護職員、ケアマネジャーなど多職種専門の人たちが連携し、早期から患者・家族とともに今後の治療・療養について話し合うことが大切ともいわれています。

今まで病気をしたことがなく、かかりつけ医を持たない人に対しては、往診医を紹介してくれる在宅療養支援事業も始まっています。口腔ケアや栄養管理で、抗がん剤治療が続けられることもありますし、在宅医による痛みの緩和、訪問看護・リハビリなど、生活を支える医療や介護もあります。

医師・鎌田實さんの著書の題名にもあるように「がんばらないけど、あきらめない」と、希望を胸に、支えてくれる人たちと一緒に考えて意思決定することを勧めます。

(第4土曜掲載)

質問募集

がんに関する質問は、徳島がん対策センターへ電0888(603)94388(平日午前8時半〜午後5時)にお寄せください。http://www.toku-gant-aisaku.jp/でも受け付けます。

支援者と意思決めよう